

いてはさらに神照寺本堂上棟記録に、供養会における引馬を記して、院主明願院、学頭如意坊をはじめ一山寺院を記すなかに、「本願寺」がみえている。周知のごとく、室町時代において、本願と称される專業の勸進聖が、寺社に隸属してさかんに活動したことは、金石文等にうかがいうるところである。興福寺官務牒疏には、坂田郡富永庄に行基菩薩開基と伝える本願寺のあったことを記しており、坂田郡米原町上多良に現存する薬師堂は、徳川家康勸進免許の書状を以て、毎年近畿北陸の勸進を許されたと伝えられたが、近江国輿地誌略によれば、本願寺とよばれた遺跡の一部であった。神照寺においてもこのような本願の住む寺が、神照寺の勸進経済と深いかわりを持って存在していたことが推測せられるのである。

以上のべたように、一山住侶の構成に認められる山伏、聖の存在、延年の一部かと考えられる舞楽の存在、死者の追善を媒介とする土地の寄進や念仏堂における二五三昧会の実修、あるいは勸進活動などに、地方寺院としての神照寺の庶民寺院的側面を認めることができる。それは又、葬祭を中心とした仏教大衆化のおしすすめられる室町時代における仏教界の動向と軌を一にするものであると云いうるのである。

## ゲーテ美学における特殊と象徴

本学専任講師 友田孝興

芸術と科学、これは丁度、呼吸と吸気、心臓の収縮と拡張といった極性作用と同様に、ゲーテにあっては、絶えることのない永遠の相補的連関運動を繰り返しながら、生きた実り豊かな真理の把握へと昂進している。

彼の科学的認識の目標は、自然と人間との内に顕現する生命の「根源現象」を、直観によって律動的に捉えることにある。真理の認識に際しては、「経験的現象」を如実に観察し、それを悟性による多数事実の持つ共通属性の抽象化によって、いわゆる「科学的現象」にまで高めることが不可欠であるが、しかしそれと同時に、経験の内には見出されることのない、例えば「物体の自由落下」というような純粹事例を構想することが特に重要である。

つまり、経験的概念に加えて、「純粹現象」(根源現象)という純粹理念の構想が必要なのである。そして最後に再び、この純粹理念を現実の場において直観確証して行かなければならない。ゲーテの根源現象とは、主観と客観との啐啄同時において直観に啓示されるところの、このような理念と経験との合一としての「根本真理」を意味する。

ところでこの純粹理念の構想とその確証を司る直観を得るため

には、芸術的な「生産的想像力（構想力）」と「鋭い愛に充ちた眼」を必要とする。科学というものは、概念的抽象化による現実の貧因化にのみ停留すべきものではなく、事物の様相の無尽の性質を明確化するところの、そして現実の生き活きた豊富な多彩な形象と、現実の形式的構造の深い洞察とを与えるところの、この美的想像的（創造的）炯眼によって、常に生氣を得て行かなければならない。

ゲートにとっては、美は自然の根底を貫流するところのイデーの象徴的顯現（根源現象）であり、世界内容の啓示である。

「美は秘められた自然法則の顯現であって、それらは美の現象がなければ永遠に隠されたままであろう。」

「美のためには法則が現象として現われることが必要である。」

つまり彼にあつては、シャフツベリーの「すべての美は真である」という教えが、常に基線として生きているのであり、美と真との緊密な実体的ともいうべき関係を承認し、自己の全存在を挙げて事物を美の内に把握するというところ、事物の全体的連関性を見ることのできる最大の契機であり、事物の生きた最も深い真性を理解することのできる根本契機なのである。自然の本質を理解するためには美を感じる必要がある。美を感じるといふことは、芸術的な生産的創造力が自然と交感しつつ、自己の内に自己の美を創造することではあるが、しかしそれは同時に、素材から形象の動的生命（本質）を抜き出すところの美的創造力が、我々の全存在を最高の集中へと導くことによつて、「ある未

知の法則が客観内にあり、それが主観の未知の法則に対応する」ことであるが故に、主観的な単なる受動的情調ではなく、客観的な世界への適応性を有するのである。芸術というものは、いまだ科学が明晰化していない概念を、すでに実践しているところの「実践科学」なのであつて、その故に、芸術的認識と科学的認識との結合こそが、生きた「実り豊かな認識」へと至るための必要不可欠なものである。科学的認識は悟性で、芸術的認識は感性で、という図式ほど彼にとつて愚しいものはない。知性と感性との生産的綜合としての根源現象を得ることこそが、彼における実り豊かな認識の根本目標なのである。

#### 根源現象

認識可能なものの窮極として理念的

認識されたものとして現実的

あらゆる場合を包含するが故に象徴的

あらゆる場合と同一的

主観と客観とが合一し、主観の全精神諸力が集中されたところに見出される「根本経験」の本質としての根源現象こそは、人間から融離した科学的現象に、再び人間との関りの中で生命を与えるところのものであり、自然の生命を抹殺するところの単なる類表象としての普遍性をではなく、現実の特殊の内にあつて、特殊を特殊として成立させるところの普遍生命を象徴するものであるが故に、ゲートにとっては、根本現象の把握こそが認識の窮極目標となるわけである。

さてこの現実の特殊相において普遍を象徴するところの根源現

象は、単に学問的認識の目標点を意味するにとどまらず、これこそが実はゲーテ美学の実践的基礎を表徴している。つまり、「詩人が普遍的なものにむかいつつ特殊なものを求めるか、あるいは特殊なものの中に普遍的なものを見るかでは大きな違いがある。まえのやりかたからは比喩が生じ、そこでは、特殊なものもは普遍的なものも単なる実例ないし例証とされるに過ぎない。しかしもともとあとのやりかたが詩の本性なのである。詩というものは、普遍的なものを考えたり指示したりせず、特殊なものを語るのである。ところで、この特殊なものを生き生きとつかむ者は、同時に普遍的なものをも手にいれているのである」と彼は言う。特殊を生動的に捉えて描写することこそが芸術の本来の生命なのである。「特殊なものには共鳴する者がいないだろうなどと心配する必要はない。」 なぜなら

「普遍的なものと特殊なものとは一致する。特殊なものとは様々の異なった条件のもとに現われる普遍的なものである。」

からである。つまり、自然というものは個別的な唯一のものを創らない、「個というものは存在しない、一切の個は類でもある」からである。

芸術はあくまでも特殊によって普通の固定化を打破しなければならぬ。自然というものは特殊においてこそ自己の生命を宿すのであり、また表出もするのであるから、特殊の生命を尊重し、特殊を生き生きと掴むことこそが、生きた実り豊かな、人間の質と価値とを高める普遍へと至る道なのである。

特殊の内に普遍を象徴するというこの根源現象の理念は、従って今や、認識の目標点と同時に、ゲーテ美学の理論的・実践的基礎となるのである。

この講演内容は、紙面の都合で簡略なものとなってしまうたが、次号の「大谷学報」において詳述するので、それによってこの内容を補って戴きたい。

( \* 88頁より続く )

### 大谷学会

#### ◇大谷学会秋季公開講演会

十一月九日 午後一時より

於 図書館講堂

ゲーテ美学における特殊と象徴

講師 友田 孝興

湖北神照寺の中世資料

講師 佐々木孝正

身体についての存在論的構造

講師 西井 元昭

神不滅論と宗教性 助教授 三桐 慈海

選訳集の書誌 教授 栗原 行信